

7 校内研究

(1) 研究主題

自ら学び、豊かに考える子どもを育む
～対話を通し、確かな力につなぐ子ども参画型の授業～

《研究主題設定の理由》

本校では、平成 25 年度から 3 年間の指定を受け、西留先生から子ども達が主体的・対話的に学ぶ学習スタンダードの流れの中で学びを深める実践に取り組んできた。また、平成 28 年から 2 年間は、探究的な授業づくりにかかる研究指定を受け、効果的に学びを深める手立てについて研究を進めてきた。その中で、言語活動が充実した学びのある授業を実現するために、全校で共通理解を図り、学習用語・思考ツール、振り返りの重視等、ノート指導の充実、学びを深める効果的な教師の役割（見通しをもたせる・介入する・ゆさぶる）等について共通理解を図りながら研究を進めてきた。昨年度は、主体的・対話的な学びの中で、いかに教科の本質に迫るか、授業において、どのように教科の見方・考え方を働かせて、本時のねらいを達成するかについて授業研究を通して研究を進めてきた。

このような研究から、授業における子ども主体の学習の流れの統一や、基礎学力の一定の向上、探究で培った図書館資料や新聞の活用などについては、県内外から視察者が多く訪れる充実した実践となっている。このように、子どもたちの授業における学び合いのベースは確立できている。しかしその一方で、子どもの実態から昨年度の課題として挙げられたのは、練り合い場面での深まりが弱いことや基礎学力の定着に個人差があることなどである。これは、子どもたちが目の前の課題に対して、自分ごととして考えていないことや、教師から言われてやるのではなく子ども自らが主体性取り組めるための教員の手立てが弱かったからではないかと考えられる。

これからの社会は、情報化やグローバル化の進展などにより、急速に変化し、予測困難な時代を迎えると言われている。そのような社会の中で、様々な困難や課題に直面した時に子どもたちが、自ら幸福な人生やよりよい社会を切り拓くことができるようになることが私たちの願いである。そこで、本校の教育活動の特色や子どもの姿を基に、学校教育目標である「仁淀川のように清らかに、横倉山のようにたくましく」の「清らかさ」や「たくましき」を具体化した姿として、研究テーマを「自ら学び、豊かに考える子ども」と設定した。

「自ら学び、豊かに考える子ども」の「自ら学ぶ」とは、新学習指導要領の目指す資質・能力として示されている「学びに向かう力・人間性」とあるように、子どもたち自らが目の前の問題や課題に対して、自分のこととして捉え、生きて働く知識や技能を習得することができる姿である。また、新学習指導要領では、『未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成』が求められている。「豊かに考える」とは、習得した基礎・基本の知識や技能を生かしながら、自ら主体的に授業づくりに参画したり、他者や自分自身との対話や自然等とのつながりの中で自分の考えを深めたり、広めたりすることができる子どもの姿を目指している。

これらの子どもの姿を目標に、具体的にはこれまでの取組により、子どもたちの中に定着しているペアやグループ、集団での学び合いをさらに深める対話を通して、子ども自身が授業づくりに参画し、教師と共に授業を計画・実施する教育活動を目指し、研究を進めていく。

《研究仮説》

次の4つの視点で授業改善を図っていけば、「自ら学び、豊かに考える子どもを育む」ことができるであろう。

- ①学習スタンダードをベースに、学び方を全校で統一した授業を行い、子どもが見通しをもち、より主体的に学びに参画できる授業づくりを行うことで、各教科の見方・考え方にせまる確かな学力を身に付けることができる。
- ②各教科等の活用・発展学習の場として、「てつがく」の学習を導入し、対話を通して、他者や自分等と向き合うことで、より一人一人が学びを広げ、豊かに考えることができる。
- ③自身の参画する授業や対話のある授業をベースに、総合的な学習の時間や体験的な学習の充実を図ることにより、より子どもたちが自分ごととして実感を伴った、豊かな思考につながる。
- ④チーム学校として、授業改革に臨むことで、つながりのある学びのスタイルが確立され、確かな学力を身に付けることができる。

(2) 研究授業

- ・年2回以上の研究授業・公開授業により、教員の授業力向上及び子どもの学び方の向上を図る。【別紙①】
- ・学習過程スタンダードをベースにした授業づくりを行う。
- ・研究教科は、主要教科（国語・算数）で行う。
- ・学習指導案（公開授業：A4 1枚 研究授業：A4裏表 1枚）【別紙②、③】
- ・授業研究の進め方をもとに、計画的に授業研究を進めていく。【別紙④】
- ・研究協議、ワークショップ、子どもミニ協議会等は、改善をしながら進めていく。

(3) 授業者論文・参観者論文

①授業者論文 資料A

○研究授業後に課題論文を作成する意義・価値

- ・自己の授業についての記録を残すことができる。
- ・研究協議会で出された意見や講師の先生からのご指導を改めて自分で考える機会となる。
- ・授業者の課題が整理される。

②参観者論文 資料B

○作成方法

- ・子どもの学びを直視し、発言や行動を多く書く。
- ・ワークショップで出された課題や改善策、講師の先生のご指導を受けた内容をまとめる。
- ・他の教師の研究授業を通して、見つめ直した自らの課題や明日から取り組んでいきたいことを述べるとよい。

③書式、作成期日

- ・A4, 1枚（書式は標準）
- ・年間一人一回、授業者論文・参観者論文の両方を作成する。
- ・論文モデルは、プロフェッショナルティーチャーズノートのモデルを参照
- ・授業者論文、参加者論文ともに、授業実施後一週間以内に作成し、決裁印を押印し、

研究主任に提出。研究主任→ 管理職

- ・ 決済後、印刷・配布。(全教員)
- ・ 作成後は、データを保存する。

保存先：

NW-OCHI	→	先生用	→	★学習部	→	□H31年度	→	☆論文
---------	---	-----	---	------	---	--------	---	-----

(4) 「ちょこっと塾」(他校から学んだことの報告会)

- ・ 若手教師は、国や県が主催する研修や先進的な研究を進める学校の研究会などに積極的に参加する。
- ・ 研修で学んだ成果をちょこっと塾で報告をする。(連絡会や長期休業中の校内研を利用)
- ・ H30年度は、プログラミング教育研修報告、新学習指導要領前面実施に向けた周知徹底の研修報告、出張先小学校研究会参加報告などを行った。
- ・ 教職員が、優れた研究実践について知り合い、情報の共有を行っている。また、報告を行うことでプレゼンテーションや資料作成のスキルも磨くことができている。
- ・ 報告をした内容は、データとして残していく。

保存先：

NW-OCHI	→	先生	→	★学習部	→	□H31年度	→	☆ちょこっと塾
---------	---	----	---	------	---	--------	---	---------

(5) 学びに向かう教室環境づくり

①教室前面・教室背面の掲示の工夫

- ・ 教室の全面は、子どもの学習の妨げとならないよう、黒板周りはすっきりと整える。(ユニバーサルデザイン)
- ・ 教室の背面には、学級目標やビーイング、行事ごとの振り返りなどを残し、学級の歩みがわかるような掲示を工夫する。

例) 行事ごとの振り返りの掲示、ビーイングの掲示、学級力の掲示など

②子どもの学びをサポートする掲示の工夫

- ・ 各教科の話し合い活動を手助けするために、話し方のスキルや語彙力を増やすための掲示物を教室の横に掲示をし、常に意識するようする。

例) 話し方のスキルの掲示、語彙を増やすための掲示など

③学習の足あとが見える掲示の工夫

- ・ 単元計画や学習内容を教室内に掲示する。
- ・ 子どもが思考する際の手がかりとなるよう掲示内容や掲示方法を工夫する。

(6) 板書とノート

- ・ 共通のグッズを使って、計画的に板書を行う。
- ・ 板書とノートをリンクさせる。 資料C
- ・ ノートコンテスト、ノート大賞により、子どものノートの向上を図る。(DCAP 参照)

(7) 学びを支える技能や方法

①学習リーダーの手引き(学び方カード) 資料D

- ・ 授業の司会・進行を子どもが行うための手引き

- ・昨年度の手引きを参考に、各学年の実態に応じて、訂正・改善を図っていく。

②学習言語わざ 資料 E

- ・言語を中心とした情報を処理・操作する領域の力を具体化してまとめたもの。
- ・学習中に子どもが行う言語活動であり、すべての教育活動の基礎となる方法や技能。
- ・大きく分けて、「書くわざ」「読むわざ」「聞くわざ」「話すわざ」「評価するわざ」
- ・どの教科の時間でも、常に意識をして学習に取り組む。

③対話言語わざ 資料 F

- ・学び合いで使う言語わざの一つ。
- ・「個人の言語力」「対話言語力」「言語力を高めるための道具」がある。

④話し合いのルーブリック 資料 G

- ・各学年、各教科における話し合いの指標となるもの。(各教室に掲示あり)
- ・子どもと共に意識をし、教育活動に生かしていく。
- ・子どもの実態に応じて改善・修正を行っていく。

⑤授業の 10 か条 資料 H

- ・学習に落ち着いて取り組むために、全校で共通して取り組む。(教室内に掲示あり)
- ・毎日の朝の会で、その日に取り組む 10 か条を確認する。
- ・学級内で 1 日意識をして取り組む。
- ・帰りの会で反省をする。
- ・横倉山委員会等の活用を検討中。

(8) シラバスについて

- ・授業では、シラバスを提示する
- ・シラバスの用語も本校の学習過程のことば+考察〈新たに導入〉とする
- ・文言を統一 (子どもの混乱を避けるため)

算数	全教科共通〈高〉	全教科共通〈低〉	理科
問			
課	課	か	課
※見 見通し	※見	※見	予
自	自	ひとり	自
ペア 班	ペア 班	ペア 友	ペア 班
			実 観 結
※考	※考	※考	考
ま	ま	ま	ま
※練 適用問題			
ふり	ふり	ふり	ふり

学びを深めるために

- ・見通し…グー (分からない・ヒントがほしい) ・パー (一人でできそう・やってみる) の統一

- ・シラバス…指導案に明記（教師・子どもともに意識）
- ・考察…言語わざ、学習用語（キーワード）の活用

（9）横倉タイム

①横倉タイムの流れ

- ・毎週水曜日の5校時目（15：00～15：45）とする。
- ・時間が終わるまでは、教室から出ない。
- ・学習内容については、各学年または学級で計画を立て、基礎・基本の定着を図る。
- ・活用問題にも取り組んでいく。（月1回以上）
- ・学期の終わりには、取り組み（どんなことをしたか）の反省をする（成果と課題）。

②横倉タイムの協力体制

- ・できるだけ複数であたる。
- ・1年生も1学期中に開始
- ・様子を見ながら、相談して交代する。

1年	松木（岡林翠）	
2年	A組：山下（安岡）	B組：若木（堅田）
3年	A組：谷中（山田）	B組：刈谷（松岡）
4年	三浦（高橋）	
5年	岡村（福本・長崎）	
6年	小川（小松・岡本）	

（10）放課後学習

①放課後学習についての内容・確認

- ・放課後学習は基本（月・火・木・金）とする。
- ・補習や個別指導については、各学年または学級で打ち合わせをしておこなっていく。
- ・放課後、下校までの時間は放課後学習の位置づけであり、新たな問題などをやってから帰らせるようにする。やるべきことが終わっていない子どもは、最後までやらせる。
- ・下校時間を必ず守る。（夏・冬：16：30には子どもは校内から出すこと）
- ・帰りが遅くなりそうな子どもについては、あらかじめ家庭への連絡をいれておく。

②放課後学習の協力体制

- ・**1、2年生**：6時間目の学習がない日の時間を確保。習熟度別の取り組みの導入も可能。
- ・**3年生以上の学年**：6時間授業後の時間を活用
水曜日以外の放課後学習 15：55～16：15
- ・有償の放課後学習のボランティアを有効活用して学力向上を図る。